

多摩産木材家具 職人の挑戦

多摩地域産木材を使った家具のブランド化を目指す家具職人、松岡茂樹さん(31)の「安全と保護の家具 Safetection

Design展」が、新宿パークタワーのリビングデザインセンター「OZON A」(武蔵村山市)を経

営。不況の中、「地元産材家具で地域経済をなんとか盛り上げたい」と昨年、伐採から製材、デザイン、製造販売まですべて都内業者が手がける「Made In Tokyo Products」を立ち上げた。不要家具を引き取り燃料チップとして再利用するまでのサイクル確立が目標だ。

「国産材は消費者の間でも注目が高い。松岡さんの試みは流れとして間違いない」と話すのは、瑞穂町の材木卸売業「東和通商」の中野歩さん(32)。都内の森林約7万80000畝のうち、7割近い5万3000

畝が多摩地域に集中。戦後、建材として杉や檜が植林されたが、高度成長期に安価な輸入材におされ山林が荒廃。状況を改善しようと平成18年、地元製材業者や森林所有者らが、適正管理された森林産であるということを証明する「多摩産材認証制度」がスタート。

同年、東京都も花粉対策として杉伐採事業を始めた。作品展にはイスやコート掛け、棚などを出品しているが、ネックは杉や檜が家具作りには向かないこと。「素材として強度不足。木目も野趣が強すぎる。最初は煮ても焼いても使えず半年ぐらい作っては壊す、が続いた」と松岡さん。漆塗りや革張りなど工夫をこらし、秋の商品化へさらに改良を加える予定だ。

松岡さんは練馬区出身でオーダー家具会社「KOM A」(武蔵村山市)を経営。不況の中、「地元産材家具で地域経済をなんとか盛り上げたい」と昨年、伐採から製材、デザイン、製造販売まですべて都内業者が手がける「Made In Tokyo Products」を立ち上げた。不要家具を引き取り燃料チップとして再利用するまでのサイクル確立が目標だ。



多摩産材が家具になる過程を説明する松岡さん 新宿の新宿パークタワー

(村山玲子)